

Tancho

第39号



春の増水とタンチョウのねぐら

理事長 百瀬邦和

3月5日、釧路地方に大雪が降りました。春の大雪は例年のことですが、今回は降雪の後に急に寒さが緩み、さらに10日の降雨で積雪が一気に溶け、釧路川の水位が急激に上昇しました。これにより釧路地方ほか道東各地で道路や線路などが被害を受けました。その時に気になったのは、河川を罫に使っているツルたちのことです。ベラヤは増水の時には標茶に滞在中でしたが、発信器の夜の位置情報から一緒にいたであろうツルの群れの罫(ねぐら)での動きが推察されます。ベラヤは8日の夜まで釧路川の中州にいましたが、9日にはすぐ隣の河川敷採草地に移り、10日には堤防をこえて堤内の採草地に動きました。北海道開発局の水位観測記録では、釧路川の水位は9日の夜半から徐々に増え、10日夕方に一気に上昇しました。ベラヤ達は増水を避けて、普段は利用しない河川敷や畑で罫をとったのでしょうか。越冬期における罫の河川は重要です。大給餌場がある阿寒の阿寒川、鶴居の雪裡川はどちらも川幅10mを超える不凍結河川で、タンチョウの重要な罫になっています。100羽を超えるタンチョウが越冬している音別や標茶町、中茶安別も不凍河川が給餌場に隣接しています。最近10年ほど十勝地方では越冬数の増加が続いていますが、10年ほど前までは、十勝川流域の中下流部は広範囲で結氷するため越冬するタンチョウはほとんどいませんでしたが、近年の暖冬傾向で結氷しない川が多くなり、罫が確保できるようになったことが関係しているように思えます。同様に根室地方での越冬数が増えているのも、中小河川が開いているようになってきたためでしょう。気候変動の影響であるのは地元にいる者としても実感しているのですが、直接的なねぐらの状況について私たちはまだ多くを把握できていません。ドローンを使ったねぐらの直接観察やベラヤの協力も得ながら、タンチョウの罫環境の把握に努め、分散に向けた取り組みに活かしていきたいと考えています。

巻頭言	・・・ 1
第6回国際エコキャンプ	・・・ 2
冬の総数調査	・・・ 3
最高齢のタンチョウとツルの長寿記録について	・・・ 4
クロヅルの確認	・・・ 5
タンチョウのおひとりさま	・・・ 6
<連載>	
鳥と自然と人⑥	・・・ 7
Belayaの続報	
<活動記録>	・・・ 8

第6回国際エコキャンプ (IEC) を開催しました

タンチョウ保護研究グループは、イオン環境財団の助成により、昨年8月に第6回国際エコキャンプ(IEC)を開催しました。これまで、夏は中国で国際ネイチャー・スクール(INS)に参加協力し、INSの活動を応援する目的も込めて、冬は日本(釧路)で国際エコキャンプを開催してきました。現在INSが中断していることもあり、今年は初めて夏にIECを行ないました。

今回のエコキャンプは、Su Lying博士とともにINSの活動に尽力され、前年の2018年に逝去された国際ツル財団のJim Harris氏を顕彰し、今後も活動を継続させる意味を含め開催しました。

日程は8月20日からの全8日間で、中国から2名、日本から3名の学生や若手活動家を釧路に招聘し、釧路市音別町直別のキナシベツ湿原を拠点として国際エコキャンプを実施しました。キャンプの内容は、環境省・釧路ウェットランドセンター・釧路市動物園・RCC担当者によるレクチャー、湿原環境の実地調査研修、離巢後のタンチョウの古巣で巣の形状や周辺環境を調査、タンチョウの生息している釧路湿原に隣接した農耕地・十勝川下流域の畑作地帯・浜中町～根室市の沿岸湖沼群の視察、浦幌町博物館・釧路市立博物館・釧路市阿寒国際ツルセンターでの学芸員によるレクチャーなどです。

特に夏季ならではのイベントは離巢後の

キナシベツ湿原にてエコキャンプ参加者の皆さん



タンチョウ古巣の調査でした。参加したメンバーは全員何らかの形でツルの調査や保護活動に関わった経験を持っていたのですが、すでに放棄された後とはいえ、実際の巣を直接見て調査をするのは初めてでした。全員が洞付長靴を履き、春の飛行調査の際に撮影した航空写真を頼りに草叢の中にある現場に入ります。

ツルが巣を離れてから3ヶ月程も経つと、巣の周辺は植物が茂り、巣そのものも巣材を



タンチョウの巣の調査

突き抜けた植物に覆われていて、経験者でないと発見は難しいものです。そこで巣を発見して最初にする作業は、巣を覆っているヨシなどの若い草を刈り取って巣を見えるようにすることです。巣も周りには腰くらいまでの水位があり、計測などの作業のために動き回るのも大変でした。巣ではツルに踏みつけられて粉々になった孵化後の卵殻が巣材の中に見つかることもあります。

学芸員によるレクチャー



タンチョウが巣を作り始める春先と調査をした8月とでは、巣の環境はずいぶん違ってはいますが、それでも北海道のタンチョウがどんな場所に巣を作り、生活の場になっているのかを現地に入って知ることは、タンチョウという鳥とその生息地を理解する上で貴重な

経験になるはずで、エコキャンプ終了後に参加したメンバーから提出されたレポートには、例外なくタンチョウの巣を訪れた際の感想がかかれていました。

来年度もイオン環境財団からの助成をいただけることになりましたので、ロシアと中国、そして日本の学生達を対象に第7回IECを開催する予定です。

今年も冬の総数調査が行われました

富山 奈美

今年もタンチョウ保護研究グループによるタンチョウ総数調査が行われました。今期の冬は例年になく暖冬で（ここ数年同じことを言っているような気がします）、お正月を過ぎても道東の積雪がほとんどなく、気温も下がらないため、タンチョウたちが越冬地に集結せず、あちこちに散らばったままの状況で班長一同、今年の調査はどうしたものかと頭を抱えていましたが、調査直前に雪が降り、気温も一気に下がったので、何とか例年通りの状況で総数調査をすることができました。1月24日から2月4日まで長期にわたる野外調査でしたが、今年ものべ146人のボランティアの皆さんに参加していただき、無事に調査を終えることができました。ご協力ありがとうございました。今年も、調査の様子をご紹介します。

1月24日(金)音別

数日前にねぐらに人が入ったそうで、ツルの動きがおかしい。それでも給餌時間にはいつも通りにたくさんのツルが集まりました。

1月25日(土)・26日(日)阿寒

朝は河畔林に霧氷が付くほどに冷えましたが、お昼頃には寒さも緩み、ツルたちものんびり



阿寒給餌場での調査の様子

給餌場で過ごしていました早朝にドローン班が出動し、川の中のツルの確認をしました。

1月27日(月)・28日(火)十勝

「70羽の群れがいる」との報が入り、その後もあちこちでツルが観察され、今年は十勝の越冬数が200羽を越えました。

1月30日(木)中茶安別

前日夜半から一日中雪が降り続け中止に。

2月1日(金)茅沼・標茶

前日は荒天でしたが、今日は天候が持ち直しました。車での巡回調査でしたが、担当箇所で天気がずいぶん違い、沢山ツルを確認した人もいれば0羽の人も（それは私です）。クロヅルを見ることができたラッキーな人達もいました。

うらやましい。

阿寒給餌場のタンチョウ

こんな風に重なったツルの数と幼鳥の数を数えています。結構大変。



2月2日(土)・3日(日)鶴居

-10℃以下まで下がる寒い朝でした。下雪裡は給餌時間めがけて、ツルが集まり餌がなくなると、さっさと川へと帰っていく出入りの激しい調査でした。調査中の目の前にシマエナガが現れ、皆でちょっとだけ和みました。中雪裡は川と給餌場を歩いて移動するツルが多く、給餌場に遅くまでツルたちが残りました。

2月3日(月)小給餌場

車での巡回調査でした。私の担当した標津



まだ寒い1月の朝にいきなり本格的なダンスを始めたつがい
ちょっとびっくりして写真を撮ってしまいました

・中標津は前日まで地吹雪だったようで、あちこち道路は吹き溜まり、電柱の上まで雪が張り付いていました。ツル以外にハクトウワシ渡来のニュースがありました、こちらも見られませんでした。

2月4日(火)中茶安別

朝は天候良好で、早朝に一度ねぐらの様子をドローンで撮影しました。しかし、午後には雪雲が出て一時前が見えなくなるほどの雪になりましたが、雲が通り過ぎるとすぐに降り

やみ、無事終了しました。

今年は、一部の調査にドローンを使い、これまで見に行けなかった川の中のツルたちの数を数えることが出来ました。飛行できる場所や範囲、電池の問題など制約もありますが、驚くほどにツルへの影響も少ないため、今後、ドローンの出番も増えるかと思います。来年も調査への参加をお待ちしています。

最高齢のタンチョウとツルの長寿記録について

百瀬 邦和

T09は、1990年に風蓮湖岸でヒナの時に標識されたメスのタンチョウです。日本でのタンチョウの標識調査は1988年の2羽から始まったのですから、このツルは黎明期からの標識調査の歴史を背負ってきた個体でもあります。毎年冬に途切れることなく鶴居村の給餌場で確認されていたのですが、今シーズン2019-20年冬には一度も見ることはできませんでした。今年も1月24日から2月4日にかけて、行ったタンチョウ保護研究グループの総数調査でも見つかりませんでした。昨シーズンまでの出現状況から判断すると、ついにいなくなってしまったのではないかとと思われるのです。事務局に残っている最終の確認記録は2019年2月15日の鶴居村・中雪裡給餌場でのもので、同年の誕生日(孵化日?)を迎えていれば満30歳になっていたはずです。それでもT09は現在



T09: (撮影 西岡)

確認されている野生タンチョウの最高齢記録です。現在、野生のタンチョウに継続的に標識調査を行なっているのは、タンチョウ保護研究グループだけですから、T09の記録は世界記録ということにもなります。T09よりも1歳若いT25とT26は今冬も確認されていますので、もうすぐ満30歳のタンチョウが記録されるかもしれません。飼育下では釧路市丹頂鶴自然公園で1976年生まれのマリが今も健在で、来月（4月）25日には満44歳を迎え、タンチョウの最長寿記録を更新中です。

一般にツルは長寿の鳥ということで有名です。最長寿の記録は飼育下ではありますが、ソデグロヅルの83歳で、ギネスブックにも掲載されています。Wolfと名付けられていたこのオスは第一次大戦中にヨーロッパで保護され、私がICFで研修を受けていた1980年にはICFで飼育されていました。

当時すでに70歳前後だったと聞いていましたが、春の繁殖シーズンには、日本から繁殖用に提供されていたメスとの間で人工授精を試みていたため、毎日のように採取した精子の数や活性化（元気に動き回っているかどうか）を顕微鏡でチェックしていたのを覚えています。まだ繁殖能力が残っていたんですね。

野生状態でのツル類の寿命については情報が少ないのですが、オオヅルでは野生状態で少なくとも20歳以上生存したという情報があります。このオオヅルはICFのBarzen博士と私が1998年3月にベトナム南部のトラムチム国立公園（当時は自然保護区）で足環とJPS発信機をつけたオスで、2018年3月に同地で保護されたとの連絡が入りました。足環をつけた時には2羽のヒナを連れた家族でしたから、当時少なくとも3歳以上にはなっていたはずで、この例は野生のオオヅルとしては最長寿の記録になるはずです。

今年もクロヅルが確認されました

百瀬 邦和

2019年秋にクロヅル1羽が中標津に現れました。12月の根雪が降る前までは、俵橋湿原ゆめプロジェクトでニオを設置しているデントコーン畑や中標津町北東部の数ヶ所で観察されていましたが、今冬には標茶町内の牧場のスタックサイロ（粉碎したトウモロコシや牧草を地面に蒲鋒型に重ね、上からシートをかけて作る牛用発酵飼料）に集まるタンチョウの群れの中でクロヅルが発見されました。

クロヅルが最初に確認されたのは、2年前の2017年10月、中標津町の収穫後のトウモロコシ畑に集まるタンチョウの群れの中で、根室地方では初記録でした。その年の冬は鶴居村へ移動し、タンチョウの越冬群の中で観察されています（会報33号：高田令子記事参照）。



タンチョウに混じてバンカーサイロ付近を歩き回るクロヅル

翌2018年秋にもクロヅルは中標津のほぼ同じ地域に現れました。このクロヅルは春に鶴居村から消えた後、夏も道東に残っていたようで、中標津市街から遠くない別海町北部の農村地帯で見られていたようです（釧路新聞2018年9月21日）。昨シーズンの越冬場所は判りませんが、今年の記録で3年連続の確認されています。夏の情報は得られていませんが、おそらく同一個体の可能性が高いのではないでしょう。

タンチョウの“おひとりさま”

武田浩平（総研大・先導研 特別研究員）



静止画：単独で踊る37V

タンチョウは一般的に成熟した後、生涯にわたってつがいあるいは家族で暮らしているといわれています。しかし、人間のように大人になっても独身で過ごすことはないのでしょうか。阿寒の給餌場に訪れる標識個体を継続的にみてきた私の観察をもとに、独身の成鳥、37Vの事例を紹介します。

37Vは根室出身の1998年生まれ（現在22歳）で、性別はオス、最近の給餌場ではもっぱら単独で行動しています。タンチョウ保護研究グループ（RCC）のまとめた過去の記録によると、5歳から阿寒の給餌場を利用し続けて、8歳から3年続けて、幼鳥連れの家族で給餌場に現れています。しかし、13歳から単独で行動しているのが目撃され始めました。私の記録では少なくとも7シーズンで単独でいることが確認されており、一度もつがいでいたことがありません。RCCの記録もあわせて推定すると10年間近く、単独でいる可能性があります。成鳥でも数年間、単独で目撃される事例はありますが、そのほとんどはつがい相手を新たに見つけるか、いなくなってしまう（おそらく死亡）場合がほとんどです。これほど長期にわたって単独で目撃される個体は珍しいでしょう。

給餌場で観察される37Vの行動も独特で、

例えるなら内弁慶な性格です。若鳥や幼鳥などの劣位の個体にはくちばしで突いたり、威嚇歩きをしたりととても攻撃的なのですが、優位なつがいや家族には威嚇を返されて、すぐに体を縮める服従の動作をして逃げています。そのためか、給餌場で個体数が少なくなってから現れることが多いです。つがいや家族の多くは各々で決まった特定の位置を好む傾向にありますが、37Vには決まった好みがなく、どの位置でも確認されています。毎年、ダンスは単独で踊る姿をみせます（上の静止画を参照）。

稀に単独で鳴き合いのオス・パートを鳴くのですが、すぐに他のつがいの鳴き合いに邪魔されて止めてしまいます。これらの特徴はしいていえば単独の若いオスに似ていますが、さらに攻撃的な印象です。

残念ながら、今回の事例は越冬期のみの観察に基づいており、繁殖期では、目撃例がなく、どのように暮らしているのかわかっていません。それでも、このように標識個体を丹念に観察していけば、これまでの常識を覆す面白い事例が見つかり、それは彼らの暮らしをより良く理解することにつながるはずです。

<連載> 鳥と自然と人⑥ 手乗りスズメ

石 弘之（本会顧問）

ロンドンなどヨーロッパの公園で、手の上に乗ってエサをついばむ「手乗りスズメ」をよく見かける。かなり昔、鳥類学の偉い先生に「なぜ日本のスズメは手に載らないの？」とたずねたことがある。「ヨーロッパのはイエスズメ、日本のはモリスズメ。種類が違うためです」と自信ありげにおっしゃる。

純情なワタシはそれを長いこと信じていた。ところが最近、といっても10年ほど前から、手乗りスズメが全国各地に出現していることを知った。パソコンの動画を開くと手乗りのオンパレード。まるでペットの犬や猫のように、かわいい動画とともに自慢話や交流のようすがつづられている。

つい最近では近所のちいさな公園でも、かなり年配の男性の手のひらの上でご飯粒を食べさせている姿を目撃した。なるほど、東京もロンドンなみになった。ブログの飼い慣らし方を読むと、ひたすら同じ場所で同じ時間にエサを置いておけばいいらしい。これには辛抱と時間が必要だ。

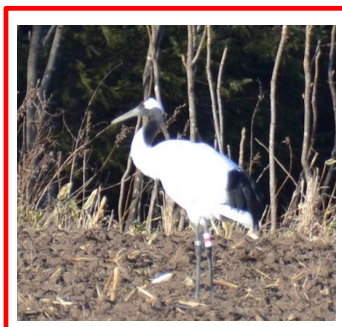
そういえばヨーロッパでも日本で飼い慣らしているのはほとんどがかなりのご老体である。わかった！これは世界的な高齢化現象の所産なのだ。

わが家でもやってみたくはなかったが、スズメがさっぱりやっこない。個体数からすればシジュウカラやムクドリの方が多そう。過去30年間で都市のスズメの個体数は半減したらしい。ヨーロッパでも減りつづけているようだ。巣をかける木造家屋のすき間や瓦屋根がなくなり、エサの不足や暮らしのストレスが高いためだそう。やっぱり、鳥にとっても都会は住みにくいのか。

友人がヤマガラを手乗りにするのに成功した、と自慢していた。しかも、エサ台に鈴をぶら下げておくと、それを鳴らしてエサをねだるようになったという。

チトラやましい。ことしはヤマガラに迫ってみよう。

Belaya(ベラヤ)の続報（事務局）



写真A : 撮影:百瀬邦和

2019年10月31日に、一旦、一羽で国後島に戻ったBelayaですが、11月5日には北海道に帰ってきました。12月5日には相棒なしで数羽の群れの中に確認されています(写真A)。中標津や標茶などで冬を過ごし、2020年3月14日に国後島に戻りました。同月19日には、なんと相棒と一緒に繁殖地に現れました(写真B)。

今年はヒナが育てば良いですね。



写真B : 撮影:Elena Linnik

<活動記録> (2019年12月～2020年3月)

- 11月29日 会報Tancho38号発送
12月2日 第2回タンチョウ越冬地解析等ワーキンググループ会議(環境省)に出席(百瀬)
12月13日 運営会議(12名出席)
12月18日 中標津町の北海道酪農試験場で試験栽培したトウモロコシを譲り受け、
俵橋湿原と武佐のニオ型給餌場に補給(百瀬、大川原)
- 1月10日 運営会議(9名出席)
1月13日 カウント調査勉強会
1月18日 カウント調査班長会議
1月24日～2月4日 カウント調査
- 2月11日 環境省主催の市民フォーラムin中標津で講演(百瀬)
2月13日 北海道開発局の北海道河川協力団体連絡協議会に出席(於:札幌 百瀬)
2月14日 釧路湿原自然再生協議会 第18回 水循環小委員会(井上)
運営会議(6名出席)
- 2月18日 釧路湿原自然再生協議会 第9回 地域づくり小委員会に出席(井上)
3月13日 運営会議(11名出席)
3月17日 釧路総合振興局と次年度の農業農村整備事業について協議(百瀬)

< 会員 > (3月30日 現在)

会員数：184名(運営会員：27名、個人サポート会員：157名(卵123、ひな31、若鳥2、成鳥0、終身1))

Red-crowned Crane Conservancy (RCC) newsletter

TANCHO

Thirty-ninth issue March 2020

<表紙写真>

撮影：富山 奈美

*2月にドローンで撮影した河川
の中のタンチョウたち(標茶)

認定特定非営利活動法人

タンチョウ保護研究グループ

〒085-0036

北海道釧路市若竹町9番21号

Tel/Fax 0154-22-1993

e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp

URL: <http://www6.marimo.or.jp/tancho1213>